特集

# 我が家の成人式
# 想いを込める特別な振袖

七五三からまだそんなに過ぎていないのに……
つい最近やっと高校受験が終わったばかりだと思っていたのに……
もう？
もう成人式だなんて！？
月日が過ぎるのは早いですね。
うれしいような、さびしいような不思議な気持ち……。
人生の大きな節目を迎えるお嬢さまのために
家族がひとつになってお祝いをしたり、記念撮影をしたり、
そんな思い出が礎となって、
これからのお嬢さまの人生にきっと力を与えてくれることでしょう。
成人式に格別な想いを込めた幸せいっぱいのご家族をご紹介。

デザイン／工藤典子
協力／
ウメショウ
岐阜県瑞穂市馬場春雨町2-24
058-327-2901
http://umesho.co.jp/

望幸
静岡県富士宮市大宮町12-9
0544-26-4153
http://www.mochikou.com/
文／大下直子

## 成人式を迎える

成人式の歴史は意外に新しく、昭和になってからのこと。埼玉県・蕨（わらび）市で「青年祭」が行われたことに端を発するといわれています。その後徐々に全国に広まり、1949（昭和24）年に1月15日が「成人の日」として祝日になりました。2000（平成12）年には、ハッピーマンデーによって第二月曜日が成人の日となり、成人式を主催する市町村により、前日の日曜日に行うところも。

そもそも最初に成人の日が1月15日になったのは、年が明けて最初の満月の日に元服の儀式が行われていたことに由来していますが、いずれにしても旧暦の頃の1月15日ですので、今の暦では建国記念日の頃。

最初に振袖を着たのは丹後ちりめんの産地である丹後の人という説が有力ですが、もしかすると各地で同時にそんなことが始まったのかもしれません。今は全国各地で成人式といえば振袖というのがポピュラーになりました。

振袖は袖の内側の振り（という部分）がとても大きく開いています。たくさんの幸せと良縁が舞い込むようにという願いで大きく開いているのだといいます。お嫁に行くと袖を詰めて留めるので、既婚女性の第一礼装が留袖なのです（※黒紋付も既婚女性の第一礼装）。

振りといえば、「人のふり見て我がふり直せ」とか「元気なふりをする」とか現代でも会話の中で使われますが、語源はこの「振り」で、踊りの振り付けも「振り」に由来しています。

また、万葉集の中にも有名な歌があります。

**あかねさす 紫野行き標野（しめの）行き**
**野守は見ずや 君が袖振る**

（紫草の野を、あっちへこっちへ行ったり来たりしながら袖なんか振ったら番人に見られてしまいます）

と、額田王が詠ったのに返して大海人皇子が

**紫草のにほえる妹を憎くあらば**
**人妻ゆゑに 我恋ひめやも**

（紫草の紫色のように美しいあなたのことを憎いと思っていたら、なぜあなたをこんなにも恋しく思うでしょうか。恋をしてはいけない人妻だというのに）

と返します。

昔、袖を振るのは、恋愛感情の表現で女性は袖を横に振ったり、縦に振ったりして自分の気持ちを表したものでした。ちなみに「彼女にフラれた」という「フリ」もまた語源は同じです。

また、19歳は女性の厄年。厄除けには長いもの、七色のものを贈ると良いといわれます。長い袖、そして振袖はトータルコーディネイトで7色くらいになるでしょうか。いずれにしても、厄を祓い、幸せを願い、呼び込む最高のきものであることは間違いありません。



花saku_12G-特集 3.indd 8-9 2017/10/19 14:48

日野家の成人式

# パパとママの子でよかった 一生大切にしたいと思います

加賀友禅

小さな頃からおしゃれで活発なお嬢さまでした。

## 運命の出会いの加賀友禅

振袖のパンフレットが届き始めた頃、お母さまのお父さまの命の期限が迫っていました。お母さまの心の底には、父に孫の振袖姿を見せてやりたいという思いが募ります。

お母さまはご主人とともに万感の思いを抱えて、病床にある父が昔、嫁入り支度を調えてくれた店を訪れました。この黒地の加賀友禅を見て、「絶対これやわ！」とひと目ぼれ。

美容院を営む日野家のご両親。京香さんのヘアセットはお母さまが担当です。形、髪質、好み……、そのすべてを分かっていらっしゃるお母さまのセットは完璧で、成人式や前撮りよりも前に想いのこもった加賀友禅の振袖を身にまとい、おじいさまと最期のお別れもできました。

「両親が一目ぼれをした加賀友禅の振袖を、私もすごく気に入りました。感謝の言葉しかありません。いつか最高のサプライズでこの恩返しをしたいと思います」と京香さん。家の娘がいちばん！と言うお母さま、最高の思い出と言うお父さま。

日野家の振袖は家族一人ひとりに、そして天国のおじいさまにもかけがえのない思い出を残してくれたようです。

京香さんの振袖をきっかけに、お正月には家族全員がきもの姿で初詣に出かけることになりました。「こんな機会は一生に何度もできないと思います」とお父さま。きものは心が落ち着いていいものだと実感なさったそうです。

ちょっと前までは、お父さまの腕の中でのツーショット。前撮りでは隣に並んで。次はバージンロードでのツーショットでしょうか……。

## 高度で繊細な染色技法 加賀友禅とは

加賀友禅の作品には、下前の衽（おくみ）の、ちょうど膝のあたりに小さな印があります。「落款（らっかん）」と呼ばれ、誰が染めた作品なのかが分かります。最大の特徴はスケッチをし、図案を起こし、糸目糊（いとめのり）を置き、色を挿して……というほぼすべての工程を一人の作家が行うということです。

そして落款を入れる。これが作り手の誇りであるとともに、責任でもあります。もちろん加賀友禅以外でも、伝統工芸士たちの中には落款なり、印を作品のどこかに残す人もいますが、加賀友禅の場合には落款を「加賀染振興協会」に登録する制度があり、この協会が会員の作る作品の品質とともに作り手の品性と芸術性を保証しているのです。会員になるためには（落款を登録するためには）師の下で最低7年の修業と、二人の推薦人が必要という厳しい世界です。

加賀友禅は、古くから加賀に伝わる梅染めがその源といわれています。京都から移り住んだ絵師、宮崎友禅斎による防染糊の普及によって加賀友禅が誕生し、武家文化の影響を受けながら発展していきました。風景を写実的に描くのが特徴で、病葉（わくらば）までも描き出す「虫喰い」や、模様の内側へ向かってだんだん薄くぼかしていく「外ぼかし」という技法が特徴です。



花saku_12G-特集 3.indd 10-11 2017/10/19 14:48

松本家の成人式

# 手描京友禅の最高峰を身にまとう誇り

お嫁入りに持ってきた訪問着に初めて袖を通したというお母さまもたおやかに、緊張気味のお父さまも一緒の家族写真。すてきな宝物ができました。

## 一番、お目が高いのは!?

松本侑奈さんの振袖選びは、侑奈さんのお母さま、お母さまの実母のおばあちゃま、そしてそのお姉さまで、お母さまの伯母さまという4人でかけました。目が利くというおばあちゃま姉妹は、あれこれと選ぶのが楽しそう。お母さまは内心「レンタルでもいい」と思っていたそうなのですが、自分も作ってもらったし、おばあちゃま姉妹が少し応援してくださるというので最後は侑奈さんの好みで決めたところ、「高いのになっちゃったんです～」とお母さまも苦笑。結局一番の目利きは侑奈さんご自身だったのでした。

この振袖は手描友禅作家「藤井寛」さんの作品で、皇室の方もよくお召しになることから「皇室献上作家」などと呼ばれます。お友だちの結婚式などでどんどん着てほしいとお母さまは目を細めていらっしゃいました。

高崎家の成人式

# おばあちゃんありがとう品の良さが際立ちます

京友禅の最高峰「丸福染匠」の振袖に、京都西陣の「梅垣織物」の袋帯という洗練された装いで大人の階段を上り始めた恵さんです。

## よく似合っているね

センスと品の良さ、着こなしの美しさが際立つ高崎家の皆さん。やさしい笑顔が皆さんの人柄と、ご一家の温かい雰囲気を表しているようです。

お嬢さんの恵さんの振袖は、実はおばあちゃまからの贈り物。孫娘の振袖を用意するというのは、至福の喜びですとはにかむおばあちゃまです。きものが大好きで、ここぞというときはきもの姿！というだけあって、選ばれた振袖は見事な逸品。紗綾形の地紋のちりめん地に本格的な京友禅を施した品の良い古典柄。打ち出の小槌をメインに伝統的な吉祥文様が趣を添えています。華やかなのに派手過ぎない配色も見事で、恵さんによく似合っています。

「大人になったなぁと、しみじみ思いました」とお母さま、「華美になりすぎず、古風な感じが良かったです」とお父さま。前撮りの日は浅間大社の枝垂れ桜も満開で恵さんの門出を祝福してくれているようでした。

## 雅やかで古典的な染色技法

## 京友禅とは

京都知恩院の門前で、能登の穴水出身の絵師、宮崎友禅斎が、狩野派の影響を強く受けた扇絵を描いていました。それまでは染めといえば、京都では絞りや臈纈（ろうけつ）などが主流で、隣り合う二つの部分、例えば花と葉などを染め分けることはなかなか難しいことでした。また、幕府から「奢侈（しゃし）禁止令」が出され、金銀の刺繍や絞り染めの総鹿の子などはぜいたくだとして禁じられていたのです。

宮崎友禅斎の描く扇絵はとても人気が高く、そこへある呉服屋が思いつき、小袖の図案を依頼。防染糊を用いた染めは禁止例をくぐり抜け、扇絵師の描く四季折々の草花、梅や竹などの華やかな模様は一気に大流行。それが友禅染と呼ばれるようになったのです。

当時、現代でいえばスタイルブックやファッション雑誌のような、きものの柄が描かれた「雛型本（ひながたぼん）」が人気でした。生地の種類や、染める色などが細かく書いてあります。そこへ友禅斎の雛型本が発行され、ベストセラーになって友禅染めの模様や技術は瞬く間に広まっていったのです。



花saku_12G-特集 3.indd 12-13 2017/10/19 14:48

小森家の成人式

# 振袖が着たいと言ってくれてうれしかった

十日町
友禅

十日町「吉澤織物」の振袖に京都西陣「梅垣織物」の帯。格調高い装いになりました。

## 本人の気持ちを大切に

男の子に囲まれて育ったせいか、ボーイッシュな真帆さん。「振袖はいらない」とか、「着ない」と言うんじゃないかとうすうす思っていたご両親。そんな真帆さんが「振袖が着たい」と言ってくれてうれしかったとお母さま。成人式だけではなくて、機会があるごとに振袖を着てほしいと願って、本人の気持ちを一番大切に振袖を選んだという小森一家。真帆さんが気に入ったのは吉祥柄の最高峰ともいうべき格調高い熨斗目（のしめ）柄。伊勢神宮で鮑（あわび）を長く削いで熨斗と呼んでいました。神事にも用いられ、結納にも使われます。

大和撫子になった真帆さんの姿に家族も皆、大喜びでした。

高橋家の成人式

# 中学生の頃から楽しみにしていました

十日町
友禅

最初はオデコを出すヘアスタイルに若干抵抗があった華子さんですが、お母さまのすすめに従ってこんなにステキになりました。

高橋家の記念すべき一枚。すてきな思い出になりました。

## 誰も着てない赤い振袖

赤い振袖と心に決めていたものの、どれも同じような花鳥風月で……、と思っていたお母さまの目に飛び込んできたのが呉服店のウィンドウに飾られていたこの一枚。こっくりとしたイメージどおりの赤、南蛮船の宝船、一面の波にくぎ付けになってしまったそうです。

華子さんが着るとやっぱりこれにして良かったと確信をしました。ヘアスタイルにもお母さまのこだわりがあり、こんなにステキな写真になりました。

お母さまは独身時代にはお茶、最近は前結びの着付け教室や謡曲などと子育てが一段落したのをきっかけに再びものライフを楽しみ始めました。お父さまのきものは、お母さまのお父さまがお召しになっていた大島紬。高橋家のきものライフは華子さんの振袖をきっかけに盛り上がりをみせているようです。

前撮りの日は、桜がちょうど満開に。こんなに運のいいことはそうありません。そこで3人そろって市内の親戚の家をきもの姿で回って、今は亡き両祖父母に見せられなかった晴れ姿を代わりに見てもらい、とても喜ばれたのだとか。

## 雪解けの美しい水が育む染め
# 十日町友禅とは

日本一の豪雪地帯、十日町はその昔、麻織物の一大産地でした。江戸時代末期に絹を織り始め、織物産地として大きな発展を遂げてきました。さらに昭和30年以降は、染物への進出も始まり、縫取ちりめん、マジョリカ御召、黒絵羽織と、次々に大ヒット商品を生み出してきました。「PTAルック」とか、「クロッパ（黒い羽織）」と呼ばれた羽織をご記憶の方もいらっしゃるのではないでしょうか。

晩秋に雪が降り始めると、春が来るまでは田んぼや畑の仕事ができず、雪は屋根の高さまで降り積もる豪雪地帯。家の中でコツコツと手仕事をする。辛抱我慢はこの土地に暮らす人々に脈々と受け継がれてきました。そんな根気強さやチャレンジ精神が功を奏して、今では京友禅に学んだ訪問着や振袖も、他の地域の染め物と比べても全く遜色がないどころか、かなりハイクオリティーな作品を生み出すようになり、著名人や有名スポーツ選手たちが着たことで話題にもなりました。創意工夫で味わい深い表現を可能にして、京友禅とはひと味違った個性や技が際立っています。

十日町友禅に関わる人々は若くてセンスも良く、新しい技術を次々に生み出しています。

花saku_12G-特集 3.indd 14-15 2017/10/19 14:48

都竹家の成人式

# 振袖とともに 受け継いでいきたい日本の文化と心

茶道や華道もたしなみ、着付け教室の先生をしているというお母さまは、ご自分が成人式の時に着た振袖をお嬢さまに着せる日を楽しみにしていました。季節の色を大切にトータルバランスを考えてきものと帯、そして特に小物は心を込めて選ぶというお母さまが今回、お嬢さまらしさが出るようにと念入りに時間をかけて選び、飾りもお作りになったのだとか。

一方のお嬢さまも、「母から譲り受けたきものやゆかたが多いのですが、現代風になるように小物などをあしらってアレンジをするのが楽しみ」とのこと。細部にまで神経を行き渡らせるのが都竹家のおしゃれのこだわりのようです。

「スペインやメキシコで行われた文化交流行事に母娘で実際にきものを着て出席されるなど、日本の文化を伝える活動を精力的にしていらっしゃいます。」

その海外での活動で強く感じた思いを、お母さまご自身が着付け教室で「美的感覚は国境を超える」と生徒さんに熱く語っているそうです。

そんな都竹母娘、こうして見事にバトンが受け継がれ、振袖だけでなく、心や日本文化への思い、そしてすてきな笑顔までもがしっかり受け継がれているようです。

お母さまの振袖写真。お母さまの振袖をお嬢さまが受け継ぐというのは、笑顔や幸せのバトンでもあるようです。

着付けの先生だけあって、子どもたちの七五三など、人生の通過儀礼はしっかりときもので。大切に育てたお嬢さま、こんなにすてきな大人の女性になりました。

花saku_12G-特集 3.indd 16-17 2017/10/19 14:49

街で見かけた

# きもの美人

振袖編

まだまだ特別の想いを込めて振袖を選んだお嬢さま、すてきな思い出づくりをしたご一家はたくさんいらっしゃいます。色、柄、コーディネイトやヘアスタイルにも注目しながら、それぞれの振袖をご紹介します。

しっかり者の依田沙恵さん。なんときものパーティーや振袖ショーでスピーチをなさったのだとか。そんな雰囲気が伝わりますでしょうか。伝統的な桶絞りの振袖は琳派の趣。ダイナミックで個性的な振袖に負けない堂々としたステキな振袖姿に家族の皆さまもうれしさがこみ上げてきます。

母娘三代で振袖選びを楽しんだという土橋亜子さん。MARUYAMA KEITAブランドのモダンな振袖に決定。ちょっと分かりにくいかもしれませんが、足袋が紅白のストライプになっているという亜子さんのこだわり。都会的でスタイリッシュな着こなしに家族の皆も大満足です。

姉妹のような永田茉那さんとお母さま。この帯はお母さまが成人式で使った袋帯です。とてもいい帯だったので、振袖は茉那さんが選んでこの帯を合わせました。ちょっと緊張気味のお二人ですが、みずみずしい新緑にお二人の姿が見事に映えました。

なんと、前撮りロケ撮影の最中に新聞社の取材に遭遇！　そのままインタビューを受けるというハプニングがあり、最初はドキドキしたものの、とてもいい思い出になったという鹿野文香さん。個性的な振袖で映画のワンシーンのような風情です。

お好みがハッキリしていたので、呉服店の店長さんは自ら十日町へ足を運んで、松田佳奈さんのご要望の振袖を探しました。そのかいあってジャストフィット！　貝桶の古典柄が本当によくお似合いです。

おしゃれな森遥香さんが選んだのは個性的な黄色の絞りの振袖。ヘアに反対色を持ってくることで装いが一層際立ちました。明るいご家族は撮影の間中笑いっぱなしのノリノリでしたが、ここはお嬢さまのアップの写真で!

今回主役の成人式を迎えるお嬢さまは三姉妹の次女の千有希さん。三姉妹がそろって振袖姿という圧巻の家族写真です。撮影中も全員元気いっぱい、笑顔いっぱいで、笑い声が響きます。お母さまも含めて「全員が主役」という明るい廣中さんのご家族！　お父さまの笑顔もはじけるはずですね。

花saku_12G-特集 3.indd 18-19　2017/10/19 14:49

「滝泰」の朧染（おぼろぞめ）の絞りの振袖がとても良くお似合いの渡辺真奈さん。老舗料亭での撮影ではさながら主演女優のような美しさでイキイキとしたオーラが出ていました。

満開の桜の下でピンク色の振袖を着るのが夢だった西尾優希さんの望みがかないました。桜の頃は雨や曇りが多く、風も強く吹くのでなかなか撮影が難しい中、奇跡的に満開、快晴、無風と条件がピタッと合って、こんなステキな思い出の写真が撮れました。強運のお嬢さまです。

新緑の頃の青空に負けない青の振袖がキュートな西本真生さん。イキイキと微笑む真生さんの隣で辻が花の訪問着をお召しになったお母さまもすてきな笑顔を見せてくれて、百花繚乱の共演となりました。

恥ずかしがり屋の中村結衣さんがキュートにはにかむ隣で、お兄さまがいつも妹を気遣うエスコートぶりにスタッフも思わず笑みがこぼれました。結衣さんの真っ赤な振袖で、仲良し家族のステキな思い出ができて、お母さまの笑顔もはじけていました。





花saku_12G-特集 3.indd 20-21 2017/10/19 14:49